

(様式第1号)

平成20年度 第2回 芦屋市社会教育委員の会 会議要旨

日 時	平成20年10月21日(火) 10:00~12:00
場 所	北館 4階 教育委員会室
出席者	議長 花木 義輝 副議長 大江 紀子 委員 安東 由則 委員 野原 三恵子 委員 中村 美津子 委員 信岡 利英 委員 樋口 茂 委員 水谷 孝子
欠席者	委員 笠原 清次 事務局 教育長, 社会教育部長, 生涯学習課主査, 同主事補
会議の公表	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 部分公開 <非公開・部分公開とした場合の理由>
傍聴者数	0人

1 会議次第

(1) 開会

(2) 議題

①芦屋市生涯学習推進基本構想素案(中間まとめ)の報告

(3) 今後の日程

2 審議経過

開会

(津村課長) それでは、定刻となりましたので平成20年度第2回芦屋市社会教育委員の会議を始めさせていただきます。開会に先だって、藤原教育長よりご挨拶申し上げます。

(教育長) ー藤原教育長挨拶ー

(津村課長) 本年10月1日付けで事務局に移動がありましたので、紹介させていただきます。文化条例を教育委員会のほうで制定していくということで、担当課長が配属になりましたので、ご紹介をさせていただきます。

－生涯学習課文化振興担当課長挨拶－

つづきまして、花木議長ご挨拶をお願いいたします。

－花木議長挨拶－

それでは、ここからは議長に進行をお願いいたします。

(花木議長) 議題(1)の芦屋市生涯学習推進基本構想素案の中間まとめについて、事務局の方から報告をお願いします。

(津村課長) 平成5年3月に芦屋市生涯学習推進基本構想が策定されました。この構想は、新森先生が中心になりまとめていただいたものであります。策定から15年経過しておりますけども、今読んでも非常にまとまった構想でございます。前回の構想の「生涯学習オアシス都市を目指して」というタイトルの由来ですが、この構想に先だって、平成元年9月に芦屋市生涯学習推進懇話会の中で提言いただきましたのが由来でございます。新森先生を中心にした研究チームに委託をさせていただき構想を取りまとめていただきました。

現在、前回の策定から15年が経過していますが、その間、平成14年に、当時の社会教育委員の会議の中で、「時代に走向した形で、構想を見直すべきではないか」との構想に対する意見を頂きました。その意見が構想へと本来移行しているべきなのですが、現在に至るまで見直しがされていないというのが現状でございます。

あわせて、平成6年に4年間という一時期にわたっての構想実現のための基本計画も出来ていたようでございます。ただ、それ以後、実質的には動いていません。やはり文化や社会教育など、行政にとってすぐに、影響が出てこないと思われる部分については、どうしても、おざなりになってしまった部分があったのではないかと考えております。これが芦屋市の現状かなということでは、非常に反省をしております。

ただ、そればかりを言っても仕方がございませんので、現在、昨年度から、この基本構想を15年たった現在に応じて見直しを図るため、昨年芦屋市生涯学習推進基本構想の素案策定委員会を立ち上げました。

その中で、まず市民の意向を把握したいとの意見がございましたので、本年3月から4月にかけて市民アンケートを実施いたしました。「生涯学習に関する意識調査」の内容について資料にそって説明をいたします。

〈説明〉

(花木議長) ご説明いただきました生涯学習推進基本構想素案についてご意見やご質問ございましたらどうぞ。

(中村委員) 2ページの追加した国際交流のところですが、今既に芦屋市国際交流協会というのがなくなっておまして NPO になっており、今は少し継続しているような中途半端な形になっておりますが、こういう書類にすると、少し違うのかなという感じが致します。

(津村課長) 国際交流のところにつきましては、策定委員会の方でもご指摘ありまして、私ども認識不足で申し訳ございません。国際理解の部分につきましては、14年の社会教育でいただいた建議の中に文言がありまして、急遽追加をしたものでございます。ご指摘の通り、表現がおかしい部分もございます。

(樋口委員) 策定体制の中で新しい方でいうと9番の行政が策定する各種計画の策定段階からの市民参画を推進すると、この対象の中でも、学識経験者、地域関係者、社会協議関係者の方々、構想ですから、一つの方向性を出すということにおいては個々それぞれが時代の流れにおいて見直されるということは非常にすばらしく出来ておるのではないかと思います。一つは時代の流れが変わっただけではなくて、この15年前に作った構想に基づいてどれだけのことをやったかどうかです。全く出来なかったということと、やったけれども、結果がどうなったという具体的なことですね。今年の2月に改定する中で、一番大事なところではないかと思います。特に教育関係の文言は、美辞麗句が並んでいますから、それこそ100年前から変わらないものが底を流れてきているのですが、その建前のことではなくて、本音の話として平成5年というバブル最中に作った教育構想が震災を経て出来なかったこと、やりたくても出来なかったこと、いわゆる事業評価をお聞かせいただければ、非常にありがたかったと思いますし、特に一般市民の方ではなく、市民活動に意欲も関心も、或いは専門的な勉強もされておられる方々が、そういう中に意見としてどう取り込まれたか。一般公募という形で委員さんを募集することや、また過去の例から言うと、パブリックコメントは出すのだけれども、意見というものは解くに返ってこない、行ったというだけ。

ですから、地域参画をしていこうというからには、計画段階から情報をまず市民と共有すること、その中で、今後どうしていくかということについてのニーズを机の上で考えるのではなくて、実際そういう形で活動されている方の生の意見を聞いて、出来ることはやっていくという風に作っていただければよい

のではないかと思います。漠然とした意見ですが。

(橋本部長) 大事なことを言っていただいて、行政が本当に弱いということを指摘されました。基本的にはやはり平成5年以降に起きた震災によって芦屋市の行政の基盤が総崩れになるような状況になりまして、その中で、ようやく復興をとげ、震災復興計画の中でいろんな経過表をその中に織り込みながら、憲章、震災復興条例が作られ、「芦屋市・まち・ひと・くらし総括報告書」が、ホームページにも載っていますが、その中で生涯学習の体制の整備や、充実については項目にあがっています。ただ樋口委員がおっしゃいましたように十分な行動計画の逐一それが出されていたというところにつきましては実際問題されていない。今回計画と申しますか、構想という中に今後の方向性も示しております。今の時代は、全てにわたって計画を実施、検証していくという流れがございますので、今おっしゃられていましたことについては、今後生涯学習基本構想の中で、機能に応じて社会教育委員の会議の中でも進捗状況を点検していただくことが、社会教育委員にさせていただく大きな役割なってくると思っております。

(中村委員) 漠然と、今見ているのですが、文言一つや内容を見ると、どうしても震災なども含めて、地域社会全体が時間と共に変わらざるを得なくなります。芦屋だけが方針を持っていても、国の方針、県の方針でまた変わるでしょうし、これをやはり長期間の構想として策定するとなると、無理があるのではないかと感じます。事項的な文言があるのですが、その中でもその時代に注目しなければならないことというのは、たくさん出てくるような気がします。全体構造として、期限をどう切るのか、ちょっとわかりかねますけれども。これで長期いくという文言ではないと思います。

(津村課長) ご指摘のように、基本の計画的な部分は10年かなと。他市をみましても期限を決められているところは10年。相場的だというご意見もありますけれども、全体構想をみるときについては、それぞれの必要な項目だと。仮に行うとすれば、例えば、10年の計画として10年、5年の優先課題をどう取り組むかというようなものが次の段階からあるということ。本来は基本計画があり、それぞれの計画を受けているものですから各施策の中に意識して上がっていくものということになろうかと思いますし他の計画の中では実際策定をする委員会があり、今おっしゃいましたように評価をする委員会を別にもっている必要がございます。

ですから、作ったところが評価をするのか、全く別の人間が評価をするのか、それぞれ考え方によると思っておりますけれども、そうした形でやっていくことに今後はなろうかなと思っております。

(橋本部長) 今の件ですが、行政が行政だけで出来る部分につきましては、うちである

程度実施計画的なものを作りまして、例えば5年ですとか、実施計画は5年ですので、それに基づいて生涯学習センターにつきましては、5年後を目指して作ろうということは可能かと思います。市の内部の調整は必要ですが。

ただ、今の時代、先ほど言いました地域、生涯学習もいつでもどこでもだれでもといいますように基本的には皆様がそれぞれのお考えで学んでいただく、そのための環境整備、普及や啓発など、機会やきっかけづくりを行政が果たす大きな役割になっていきますけれども、主体的には市民それぞれの方がやってきたという場面が多くありますので、そういう意味で各市とも構想という名で基本計画がありますけれども、年次を区切ってどこまでやれば達成に到達するか、どこまでを達成できたかとするのが非常に難しいことです

(樋口委員) 長期スパンのことについておっしゃったのですが、津村課長がおっしゃったように、総合計画という一つの大きな市全体としての計画、その中における生涯学習の位置付けをどう見るかという理論からしますと、いまの第3次総合計画が昨年の中見直しがあり、基本的には平成22年度ですから、今から4年という中で、第4次総合計画というものを当然作っていかれると思うのですが、となりますと、おそらく2年後くらいにはそのための策定委員会が設置されるでしょうと思いますから、そうしますと今この時期にこれを作るタイムスケジュールという意味からすると、もう一度見直しして4年後にそのような形で施策をつくるという中にしますと、どうもこれは15年前のやり直しであって、これから2年、4年という一つの短期的な中から見た時に、この位置付けをどうしていくかというような辺りをもう少し掘り下げた方が逆に言えば、今の第3次の指針に出ている中で、どうしてもこれだけは達成したいという重点項目を、絞り込んで、今年度中にやるという目的をつくり、そしてその段階を経て、4年後の総合計画に反映させるという柱を作っていく。特に市民参画という形で、なぜその地域をあげて、学校も拠点、社会教育施設も拠点、或いはそれ以外の市長部局がもっている施設も、ネットワーク化して同じ拠点として、横でつながっていくという体制をここ2年でもし出来れば、おそらく4年後に大きなインパクトとして総合計画に入っていく可能性があると思うのです。ですから、まちづくりという視点から考えていけば、市のあらゆるものがその構想の中に盛り込めるかどうか。

そのためには、人材をどう発掘して、それをプールして、そしてニーズに応じて活動していただける、そういう仕組みを集約して、ここ2年間詰められた方が良いのではないかと思います。

(大江委員) そうですね。行政側と市民の意識の格差が私はあると思います。市民の中にも意識の格差があると思います。地域のネットワーク作りというのがありますけれども、こういうネットワーク化は必ず実現しないと思います。

芦屋市にはいろんな会があり、本当にありとあらゆるところに出席しないといけません。しかし、行ってみると顔ぶれが全く同じということで、全然広がっていかないという会もできています。おそらく、その漠然とした話が下まで浸透していかないで、今樋口先生がおっしゃいましたように、拠点など、何か二つ三つでいいので集約したところで発展して行って、それからつながっていけば、この基本構想がまとまっていくと思うのですが。このまま、漠然と出されても市民としては、やはり意識がない人も多いと思うので、公募してもゼロというのはそういうところにあるのではないかなと思います。つまり関心がないのです。

それこそ、呉川町の福祉施設は、地域に関わってくることなので、その地域の方にとっては、関心があると思いますけれど、それ以外の方にとっては、あまり興味がない。同じように 1 ページ目にあります家庭の教育力、PTCAとありますけども、PTCAイコール地域の教育力だと思いますので、この項目は一つでいいと思います。学校は別として、家庭地域の教育力とそれに伴う地域活動という形で、家庭教育力のところに学習会などを開催しとありますけども、PTAとしましては、学習会に参加者が集まらないという現状がありますので、あまりこういう言葉を出されると、かえってこちらがひいてしまう恐れがあると個人的には思っています。

(野原委員) この原稿をいただいたとき、大江さんがおっしゃったように、前回構想の焼き直しというイメージを強く持ちました。文言を少し訂正して、時代に合わせて、申し訳ないですが、すごくお役人仕事という感じがいたしました。

今お二人がおっしゃったように、こういった焼き直しの文章でいくと、芦屋で何が大事なのかというところがぼけるのです。

ですから先ほど言いましたように、文言だけではどうしても市民の前に出ます。そうしたら、実際にこんなのは読む気がしないです。何を言っても、いいことばかり言ってというように、どうしてもとらえるではないですか。何が今私達にとって、市民にとって、感じなければいけないのか、考えなければいけないのかということが、これだけは、もちろんこれに何か付随しているものがあるにしても、これを見ると、確かなのです。

それと、市のお考えはわかるし、これはそのある程度の基本構想なのに、引がかかったのは私たちが団塊の世代だからなのかわかりませんが、団塊世代という言葉がありますが、こういう一時期の人たちの一時期の社会現象ではあっても、こういう文言に入れるというのは実際運用のものなのかと思ってしまいます。本当の理想的な基本姿勢を直したのか、それとも具体化しているところを、もう少し直していこうとしているのかが、もうひとつよくわかりません。

これが具体的実践できるのかというのをイメージすると焼き直したのかなというイメージがどうしても付いて回ります。

(信岡委員) この十数年、こういう生涯活動を実践していた者として、感想を言います。私が介入しているところは芦屋川カレッジというところでございます。平成5年から基本構想の最初の素案が現れて、平成20年で15年経っているわけです。芦屋川カレッジというのは現在25期生が現役です。最初は半年で1,2回やりましたから、23,4年経っているのですが私が立ち入ってきた実感を申し上げます。

この20期生くらいから芦屋川カレッジの受講者の質が、かなり変わってきている、これは何だろうと私は最初不思議に思いながら、自分なりに分析を行ったのですが、大震災後、かなりの住民が入れ替わってきているなど。その中に先ほどおっしゃったような団塊の世代が含まれつつあるわけです。先ほどアンケートの数字から何パーセント、何パーセント、全国はどうだというお話がありましたけれども、アンケートが芦屋市在住でみたら、もっと変わるのではないのでしょうか。例えば、芦屋市にずっと住んでいる人たちのアンケートの答えと、この十年くらい在住歴のある方たちの答えと。

実は芦屋川カレッジの中にも、芦屋という文化都市のステータスを非常に期待して入ってきた人たちがたくさんいるのです。新しい転入者というか。その割には大した事なかったと。過去に自分が住んでいたところはこうだった、こうだったというような話が芦屋川カレッジの内部の中でもたくさん出るわけです。何が欠けているか、何が芦屋市としては充実しているかという違いがよくその中で語られています。そういうふうなことを考えますと、現在芦屋市がやっている生涯学習活動という中で、かなりの活動実績をもっている拠点がいくつかあるわけです。コミュニティでもそうでしょうし、公民館活動でもそうでしょうし、芦屋川カレッジでもそうです。そういう活動の実績のある拠点から、そこを拠点に広げていく形が一番具体性を持つのではないのでしょうか。今、公民館がかなりリニューアルしながら、自主的な経営姿勢を取り入れ始めまして、かなり見違える活動が出始めています。そういう具体的な活動の実績を持っているところをもっと市としても注目し、そこに力を注入していけば、これは必ず横につながる。一般的な理念としては非常によく出来た言葉が網羅されています。これは一般理念としては、一つの考え方として正しいと思いますが、何の意味もありません。

では、芦屋はどうするかという場合の具体例は、この網羅された中には出てこないです。私はそういうことで、自分が実際の体験者として考えるのは、既に十数年の活動をもちはじめた幾つかの拠点を、もっと注目なさせてそこを拡大充実させていくという施策を具体的に取り入れていければ、か

なり身のある結果が出るだろうと思います。そういう考え方が一つあるのと、少子高齢化とか、現在も進行中ですので、前提とした対応策は講じていかなければならないということですが、基本構想の中にも当然かなりの部分盛り込まれているという気がします。そんな感じで、実際やってきた十年間を振り返って見て、特にこの4、5年の芦屋川カレッジの受講生の質が、変わってきたというところを、皆さん方、行政の方ではどうお考えになられるか、そのところをお願いしたい。

芦屋市在住歴の長い方、最近入ってこられた方、他の土地での都市生活を体験してこられた方たちの意見というものがいろんなアンケートをとられる場合にも、参考になるようなとられ方をしたら、かなり変わった意見が出ます。以上です。

(花木議長) 議長として発言させていただくとしたら、生涯学習活動が必要として感じておられる方が80%を越しているというのは、すごく大きな数字なのです。こういうことを感じていらっしゃるということは、生涯学習活動をも、求められていることに直結するものであると思いますので、求められておられるのであれば、そういう環境整備をし、しっかりとした形を作り、期待に応えていけるものを作り出さなければいけない。それが一番大事だと思います。

体育館等でも、お仕事が忙しくて参加できない方、大阪辺りで勤務されて帰って来るのが8時を回ってしまう方がいます。そうすると体育館の開放時間は、9時までですからほとんど参加できないということもありまして、開館時間を市の方へ申し入れまして、時間を延長して使ってもらおうということ、一部ですが今スタートしています。そういう施設を、どんどん市民の皆さんが生涯学習活動に参加していける場を作って与えていくということは非常に大切だと思います。アンケートでは8割方はそれを求めておられるわけですから、すごいことだと思います。それに応えるということは、そういう環境整備と合わせて、求めておられることに対して応えていくという素案をしっかりと作り、計画性をもって実行していただくことが現実の問題を解決していくことにつながると思いますし、生涯教育を通して、コミュニティ活動を通して、学んでいくということですから、私が最初に申し上げた通り、全てはやはり人づくりに根底があるのだということであれば、コミュニティを図るにしても、地域を活性化させるにしても、全て協力関係の中から出てきているわけですから、人の考え方を変えることによって全然変わってくるのではないかということになります。私はスポーツを通して、いつも体協の中ではそのことを言っているのですけれども、とにかくスポーツというのはただ競技をするだけではないと、生涯教育であり、社会教育であり、ス

ポーツを通して人を創っていくという考え方を基本的に根底に持っていないと、活動が何だったのかということになりますということも加えて話をしたいのですが。

非常にそれぞれ、実践していく場を大切にしないと、構想は構想でいいのですが、構想のみで終わったのでは、意味がないということなのです。

社会もそうですが、時代も社会もどんどん変化しておりますので、それに対応した考え方というものはもちろん、もつべきだと思いますけれども、要するに、これを作っている根底にあるのは、いかに心豊かで健康な人を生み出していくことが非常に大切だと思います。

そういうことで、素案について、外れたかもしれませんが、生涯教育にこれだけ関心を寄せていらっしゃるということは、求めているということなのです。それに応じていくという計画が必要ではないか、対応が必要ではないかと思います。

(信岡委員) 生涯学習という理念の中に、公民館改革という形で一つのきっかけを作ってくれています。先ほど、私は芦屋川カレッジのことを言いましたけれども、芦屋川カレッジの受講生というのは、1年だけなのです。大学院を作ったとしても、1年だけ。何故、芦屋川カレッジが大変な力を持ち始めたかというところを修了した人たちを学友会という組織でまとめ始めてから、ここは一切行政の支援は受けず、全て会員が自前でやっています。この前、市長を委託コンサートにお招きいたしまして、ご挨拶いただきましたが、あれも会員の自前の催しで、かなりの部分は芦屋川カレッジ修了生の自前の行事がたくさんあり、そこまで育てていったということは何が原動力かといいますと、男性なのです。

芦屋には400幾つかのいろんな社会教育関係団体がありますが、男性が入ってきますと、力強さと継続性があります。今一番男性が入っている団体では芦屋川カレッジが最高でしょう。少なくとも50%以上は男性ですから。現在、修了したものは2300人くらいおりますが、もちろん亡くなった方もたくさんいらっしゃいますが、現在活動している人たちはかなりの部分は男性がリードしています。だから生涯学習の基本構想やそういったものを推進する原動力のエネルギーを引き出すためにはどれだけ男性を巻き込むかということです。

では男性は関心あるのかといいますと、私の話の経験から言いますと、みんな現役時代にかなり苦勞しておりますから、今から人の世話をするなんて、そんな余計なことはしたくないというのが最初の発想なのです。しかし、一度巻き込みますと面白さがわかるのか、やりがいを新しく見つけ出したのか、やはり大変なエネルギーになっています。

これは、社会教育委員の人たちとお話する機会が多いのですが、芦屋川カレッジの学友会という組織は、他所の市にはちょっと輪形的なことがないということは、指摘されております。こういう縦のつながりをご参考になさってほしい。

(津村課長) 一つは、個人的に見ますと、公民館のグループの育成に携わり、芦屋の公民館事業は日本一だと思って関わった自分の時代を思い出しながら、そういうふうに言っていただき、非常にうれしく思っております。

構想の方に話を戻しますと、ご指摘の通り、先ほど全体的に及んでいるという分につきましては、やはりこの構想の性格上、全体の施策に渡って生涯学習の視点を持つという部分からそうになっていったというのが一つ、もう一つは、素案の策定委員会の方にとっては、もっと夢のある、もっと芦屋らしいものが望まれております。ただ一方で現実を考える行政の立場から見ると、そこまでいえるのかというギャップがあります。その産物的なものが、この項目の中に幾つかあるかと思えます。だから、素案の策定委員会の中でも、ちょっと重点項目について見直したほうがいいのではないかという意見も実際ございました。その辺は協議をしていきたいと思っております。ただ、他の計画の中でもそうございましたけれども、その現実だけを見て、絶対出来るかどうかだけを判断して作る計画は、何のおもしろみもない形容になると思えますし、これできない、これもできないという財政状況があります。かといって、夢ばかりの夢物語のような計画を作ると意味がございませんし、私どもといたしましては、市として生涯学習のまちづくりを進める上での目指すべき方向、目標というぐらゐの位置付けになるものができればと考えております。

いろいろご指摘をいただいて、何かからお答えしてよいのかわかりませんが、今の考え方としてはそういう方向性を持っております。ただ、ご指摘いただいたようにまず何を取り組み、何をどう重点化させていくかというのは、また協議をしていきたいと思っております。

(橋本部長) 私の方からは、第二次総合計画の計画・発展年度のことにつきまして、ご指摘いただいた整合性の問題、この生涯学習基本構想事務局サイドの行政経営、第二次総合計画担当の課長も入っております。そういうことで、そういう意見も中に取り入れながら、第二次総合計画のなかでスムーズに生涯学習基本構想に取り込めるように、調整しておりますので、それは問題なからうと思えます。

それと先ほど私が申しましたように、結局構想ですから、将来的にははっきり言えない、何を重点化するということは方法次第について社会教育委員の皆さん、実践活動の豊富な皆さん方がこういう方法ならお金がなくても出

来るのではないか、こういう方法で動いてみたらというアドバイスを是非いただきたい。それを一つずつ具現化することが生涯学習の振興につながると思っておりますので、少しでも、今日より明日というふうな思いで日々、芦屋市が市民の皆さんが本当に心豊かな社会生活・市民生活を送っていただけるような状況になればと思っておりますので、是非ともお力をいただきたいと思っております。

(花木議長) 他にご意見がないようでしたら、報告事項等ございますので、この辺で終わらせていただきます。それでは、事務局の方、報告等ございましたらお願いいたします。

(津村課長) 花木議長と出席してまいりました、10月6日の兵庫県の社会教育委員協議会の中で昨年度の兵庫県社会教育研究大会の記録が配布されましたので、コピーを皆様にお渡ししました。またご査収いただければと思います。

また、連絡事項といたしまして、二点ございます。一つは11月20日に兵庫県の社会教育研究大会が県民会館で開催されます。各ブロックごとに役割分担がありますが、今回芦屋市は役からは外れております。平成22年度の県の教育研究大会では役割が回ってくることもございますが、今年度につきましては役割はありません。

また、参加をとりまとめさせていただきますので、ご協力よろしく願いいたします。

もう一点は11月28日の阪神南地区社会教育委員協議会研修会についてご連絡します。会場は市の分庁舎にて開催を予定しています。また詳細につきましては、決まり次第ご連絡させていただきます。

(田嶋主査) 二点目の研修会について補足ですが、阪神南地区の社会教育委員協議会の方でお話させていただきまして、毎年、各市の審議内容等を報告してきましたが、芦屋は今回阪神南地区の当番市ということで、今回の研修会については、今までの形を辞めまして、講師をお呼びして、お話を聞かせていただく形での提案をさせていただきました。

阪神南地区の協議会の方では、その提案がとおりにまして、今回の研修会は講和を聞かせていただいて、後に質疑応答という形でさせていただきたいと思っております。また近々御案内をさせていただきたいと思っております。

一番目の県の研究大会ですが、10月6日の県の社会教育委員の会議でいただいた資料のみで、詳細についての連絡はまだきていませんので、まだご連絡ができない状態です。日付等はわかっていますので、先にお示しさせていただいて、参加につきましては、後日お聞かせいただこうと思っております。

よろしく願いいたします。

(津村課長) 連絡につきましては、以上です。合わせて、構想の関係でございますが 25

日土曜日の昼間及び29日の夜に、市民センターにて市民説明会を開催する予定となっております。もし御都合よろしければご出席いただきたいと思います。この最終構想については、内容にまた変更があると思いますので、その時にはご報告をさせていただこうと思っております。今日はどうもありがとうございました。